

緩和ケア内科レジデント研修カリキュラム

想定される研修対象者

現在あるいは将来において、がん患者の診療にあたる医師(医療従事者)であり、癌の部位や内科系外科系の基本診療分野は一切問わない。がん診療の一分野としてレジデント期間の1～2か月程度の緩和医療専従を想定している。

研修目的

緩和医療に関する知識や態度と技術を習得し、がん患者の多岐にわたる苦痛を理解する。

研修目標

がん患者が経験する定型的な苦痛を学術的に理解し、病態や機序に応じた適切なマネジメントを実践する。がん疼痛や悪心・嘔吐に対してよく用いられる薬剤使用に習熟する。

到達目標(研修期間に応じて)

2週目まで到達目標

がんによって生ずる痛みの診断の手順や痛みへの対応の基本的な考え方を学ぶ。よく用いられる抗炎症鎮痛剤・オピオイド製剤・鎮痛補助薬等の特徴を学ぶ。

1か月目まで到達目標

全身衰弱が著しい患者に対して、ベッドサイドで負担のない範囲での診察法や終末期の医療介入のリスクベネフィットの考え方を理解する。また非薬物的な介入(生活支援)が有用な患者群が一定数いることを経験する。予後の限

られた患者家族らが持つ悲嘆や苦悩を理解し、どのような態度が望ましいか実践する。

2か月目到達目標

ルーチンな患者対応業務を進める中で、緩和ケアという言葉が医療従事者・患者・その家族の間の多くの人々で誤解を招いている現実を知る。その現実を知ったうえで、研修終了後のがん診療に生かしていただければ、1～2か月の短期でも意義深い研修と考えている。

専門性の高い緩和医療とは

「がんによるさまざまな苦痛に対して、全人的評価を行う」ことに慣れることが緩和医療の肝なので、スキルアップや症状解決を優先とする指導とやや異なり違和感を覚えるかもしれない。しかし当科では、診療にあたり決して客観的検査をないがしろにせず、エビデンスレベルや関連ガイドラインの遵守は非常に大事にしている。

指導体制

部長(日本緩和医療学会専門医)、医長が指導にあたる。

研修内容

症状緩和への医療的介入を学ぶ他、本領域に欠かせない在宅医療の役割への理解や地域でがん患者を支える医療体制がどのようになっているかを知ること研修の一つです。

1. がん対策基本推進計画の中の緩和ケアの位置づけについて

2. WHO方式がん性疼痛治療法について
3. がん以外の原因による痛みの鑑別
4. 緩和的放射線治療の実際
5. 痛み以外の様々な身体的苦痛にたいする対応
(呼吸困難・悪心嘔吐・消化管閉塞・腹部膨満感、不眠、気持ちのつ
らさ・皮膚や口腔内トラブル・せん妄など)
6. がん患者の心理社会的側面・スピリチュアリティを理解する
7. 療養の場の調整(在宅医療機関等との連携)を計画する
8. 緩和ケア病棟・緩和ケアチームなど院内の緩和ケアサービスの機能
を知る

研修方法

主治医として緩和ケア対象患者を担当して、苦痛マネジメントを学んでいく
(2021年12月現在、緩和ケア病棟閉鎖のため直接主治医にはならない)。
また、多職種によるカンファレンスに参加する。

研修評価方法

指導医と定期的な面接を行い、自己評価とそれに対する助言を受ける。到
達目標設定については、研修者の研修期間に応じて臨機応変に変更してもよ
いこととする。